

十五～十七世紀のロシア年代記における 『スウェーデン王マグヌスの遺言状』の諸系統について

中 沢 敦 夫

I. 問題提起

『スウェーデン王マグヌスの遺言状 *Рукописание Магнуша, короля Свейского*』（以下『遺言状』と略記）は、スウェーデン王マグヌス・エリクソン(1316-1374)自身が書いた遺言という体裁で、15世紀から17世紀にかけて編集されたノヴゴロド、モスクワの多くの年代記の6860(1352)年の記事の一つとして収録されている。

筆者は現存する150本あまりの写本を検討し、この作品について包括的なテキスト学的研究を行った。本論は、その研究によって明らかにすることができた作品のテキストの歴史を全体的に概観することを課題としている。

作品が筆写されて後代に伝わっていく中世ロシアの文献の場合、写本のテキストの流れを追っていくと、ある時点で作品が全面的で顕著な改変をこうむることが一般に観察される。これは、写字生の作業が作品の機械的な筆写にとどまらず、なんらかのかたちで動機づけられた（イデオロギー的、文体的、記述の補足など）改変を作品に加えることによって生ずる。テキスト研究の上では、これを系統(*редакция*)の成立としてとらえ、テキストの歴史はこの系統の展開として叙述されるのが普通である。¹

本論では『遺言状』の諸写本のテキストを比較分析することによって、系統の成立とその展開を探っていきたい。² そして、特定し得たそれぞれの系統について、その成立の年代、場所、状況、原因、テキストの性格などについて考察する。さらに、結論として、諸系統の成立を大きな節目とする『遺言状』のテキストの歴史を全体として見渡し、その特徴的な点についても論及したい。

なお、『遺言状』のテキスト史研究にあたってなによりも考慮に入れなければならないのは、これが年代記収録作品であり、年代記の変化にともなってテキストが変化していることである。それゆえ、作品の系統の成立、展開も、年代記そのものの成立、展開に緊密に関連している。本論で作品のテキストの歴史を年代記の展開と重ね合わせて記述しているのは、そのような理由による。

II. 最初期のテキストの問題

現存する写本から見る限り、『遺言状』のテキストは年代記によってのみ伝わっている。筆者が実見し得た写本は、すべて年代記の記事として収録されているものであった。なるほど、歴史的文献を集めた「文集 сборник」の中に単独で収録されているものも何点か発見されたが、テキストを分析すると、すべて後代の年代記記事からの抜き書きであり、現時点では年代記に収録される以前のテキストの状態を反映している写本は一点も見つかっていない。

『遺言状』を含む年代記のうちもっとも早い時期のものは「ノヴゴロド・カラムジン年代記（第二部）Новгородская Карамзинская летопись, вторая подборка」(HK2) [РНБ, F. I. 603, Л. 346об.-347об.], 「ノヴゴロド第四年代記 Новгородская четвертая летопись」(H4) [ПСРЛ Т. 4, Ч. 1, Вып. 1. 2-е изд. 1915, 281-82], 「ソフィア第一年代記 Софийская первая летопись」(C1) [ПЛДР 4, 58-61] の三点である。初めの二点はノヴゴロドで15世紀前半に編集されたもの。C1 はやはり15世紀前半の成立だがモスクワで編集されている。³

A. シャーフマトフ以降のロシア・ソビエトの年代記研究の成果によると、以上三つの年代記は一つの共通の出典をもつとされている。これは一般には「ノヴゴロド・ソフィア集成本 Новгородский-Софийский свод」(HCC) (もしくは「1448年集成本 Свод 1448 г.」) と呼ばれているもので、まとまった写本のかたちでは現存せず、上記の諸年代記の記事の比較分析からその存在が推定されているものである。HCC 成立の年代と場所については諸説があり、いまだ定説となるものは存在しないが、筆者は、おそらくモスクワ府主教フォーチイの指導のもとにモスクワで1418年頃に編集されたと考えている。⁴

Ya. ルリエが詳細に分析しているように、HCC は各種の年代記的な記事だけでなく、モスクワ的な政治傾向を代表する実用文書、作品を積極的に集成本に取り込む傾向があった [Лурье 1976, 67-121]。そのため、「府主教キプリアンの遺言 Духовная митрополита Киприана」「エディゲイの文書 Грамота Едигея」など、本来は年代記とはかかわりのない文献もかなりの数が収録されている。同様に、『遺言状』もまた、ノヴゴロドのみならず全ロシア的な意義をもつ文書として、HCC の集成者の手によって年代記の中に取り入れられたと考えるのは自然なことだろう。⁵

HCC に収録されたテキストがどのようなものであったかは、最初期の年代

記のテキストの比較分析によって推定する他はない。HK2 と H4 のテキストはほとんど同一で、これと C1 のテキストとはかなりの相違が認められる。両者の違いを比較すると、C1 で様々に表現されているルーシとスウェーデン双方の指導者の肩書きが、HK2-H4 では князь に画一化されている。また、C1 では具体的な記述が HK2-H4 では単純化されている部分がある。⁶ 全体として HK2-H4 の異読のほうにより強く動機づけられていると言える。これは C1 が HK2-H4 に先行していること、言い換えれば、HK2-H4 は C1 (あるいはその原本) を改変して成ったものであることを示している。以上から、C1 のテキストが HHC に収録されたと推定される原型テキスト(протограф)に最も近いと結論づけることができるだろう。⁷

Ⅲ. 15～17世紀におけるテキストの諸系統の展開

HCC において初めて年代記に収録されたと推定される『遺言状』は、HCC を主な源泉とする後代の多くの年代記に受け継がれ、伝えられていった。そこでの系統の成立と展開を検討した結果、六つの系統を特定することができた。そのうち二つの系統については、それぞれ四つと二つの版(вид) (動機づけの弱い異読をもったグループ) をさらに分類した。以下、それぞれの系統と版についてその成立とテキストの性格を検討する。なお、作品の系統の全体像については、本論の末尾に付した「十五～十七世紀のロシア年代記における『マグヌスの遺言状』のテキスト進化の系統図」を参照されたい。⁸

1. ソフィア系統 Софийская редакция

原型テキストにもっとも近いと推定される C1 のテキストは、その基本的な性格を保持したまま、この年代記にもとづいて編集された全ルーシ的な諸年代記の中に伝えられていった。15世紀後半～17世紀の時期は、モスクワ・ルーシの支配権確立を政治的背景とした年代記隆盛の時代にあたっており、この系統は多くの年代記の中に伝わっているが、テキストの異読の傾向と年代記の展開の歴史を考慮に入れた結果、この系統をさらに四つの版(вид)に分類した。

1-1. ソフィア第一年代記版 вид Софийской первой летописи

「ソフィア第一年代記(古輯本) Софийская первая летопись, старшая редакция」(C1-ст) [ПЛДР 4, 58-61] のテキストを代表とする版で、C1 の原本(протограф)が編集されたときに成立したと推定される。成立は15世紀中頃で、モスクワで編集されたと考えられる。その後1456年には記事を補足し

た「ソフィア第一年代記（新輯本）Софийская первая летопись, младшая редакция」(C1-мл) [ПСРЛ, Т. 5, 1851, 22] が編まれ, 『遺言状』の記事もまた若干の改変をこうむったが, 基本的な性格に変化はなかった。

前述のように, この版は НСС の原型テキストをもっとも忠実に保持しているが, テキストに登場するモスクワ公のすべてに великий князь の肩書きをつけ, 名と父称で呼ぶなど, 称号の過度の修飾が認められる (注6 参照)。これは C1 全体に観察されるこの年代記の特徴であり [Лурье 1976, 72-73], その意味では, この版の『遺言状』のテキストには C1 の編集者による改変もわずかながら加えられていると推定される。

この版本はソフィア系統に属する他の三つの版の直接の源泉ともなっている。

1-2. ヴォログダ・ペルミ年代記版 Вологодско-Пермский вид

この版は, НСС もしくは C1 を再編集して成立したと推定される「15世紀70年代初頭の全ルーシ集成 Общерусский свод 1471-1472 гг.」に源泉を発している。版の成立は「ヴォログダ・ペルミ年代記 Вологодско-Пермская летопись」(ВП) [ПСРЛ Т. 26, 1959, 115-16], もしくはその原本が編まれた際におこなわれた『遺言状』のテキストの手直しによると考えられる (15世紀末)。

ВП に反映されている上記の「全ルーシ集成」はノヴゴロド関連記事を大幅に削除し, 歴代モスクワ (大) 公の主導権を強調しているが [Лурье 1976, 128-29], 『遺言状』テキストの手直しは字句の変更程度にとどまっている。おそらく, ノヴゴロドの対スウェーデン外交におけるモスクワ諸公の役割を強調したこの作品に編者は格別の不満をもたなかったのだろう。

この版は15世紀末に成立した「ニカノール年代記 Никаноровская летопись」(Нкр) [ПСРЛ Т. 27, 1962, 65-66] にも伝わっている。

1-3. ティポграф・ヴォスクレセンスキイ年代記版 Типографско-Воскресенский вид

1479年頃にモスクワで新たな集成本(Московский свод 1479 г.)が編集されたときに, その編集者によって『遺言状』が手直しされ成立した版。ソフィア系統のテキストを基本的に受け継ぎながら, 部分的な改変が加えられている。改変箇所はわずかで, 文体的手直しが主体。分かりにくい部分を教会的な表現に変えたり, 文体的に読みやすく, 整合をはかる程度で, 明確に思想的な編集意図は認められない。この版の流れはモスクワにおいて公式の年代記の位置を占めるようになり, モスクワ・ルーシの勢力拡大にともなって後代の年代記集

成に引き継がれ広まった。

16世紀初頭の「ティポグラフ年代記 Типографская летопись」(Тип) [ПСРЛ Т. 24, 1921, 120-21] 及び16世紀中頃に編集された浩瀚な「ヴォスクレセンスキイ年代記 Воскресенская летопись」(Воскр) [ПСРЛ Т. 7, 1856, 216-17] における「遺言状」のテキストは非常に安定しており、当時は、記録に残しておくべき歴史文書と見なされていたと思われる。Воскр から発している「ピスカリヨフ年代記 Пискаревский летописец」(Писк) [ПСРЛ Т. 34, 1978, 112] にもこの版が受け継がれている。

16世紀後半編集の「アルヒーフ年代記 Архивская летопись」(Арх) [ЦГАДА, Ф. 18, Тщ. 20, Л. 324об.-325об.] ではこの版が基本的に用いられているが、ごく一部に「ノヴゴロド第五年代記」のテキストによって補正されている部分が認められる。これは Арх 全体の源泉がモスクワ集成とノヴゴロド年代記に分かれていることを [Словарь книжников 1989, 37], 「遺言状」の中でも忠実に反映していると言える。なお、この補正は機械的な字句訂正にとどまっており、別の系統・版を特定するだけの動機づけは認められない。

1-4. 後期ノヴゴロド年代記版 Поздно-Новгородский вид

16世紀末から17世紀にかけてノヴゴロドでは地方的特色をもった年代記「ノヴゴロド・ウヴァーロフ年代記 Новгородская-Уваровская летопись」(НУВ), 「ノヴゴロド・ザベーリン年代記 Новгородская-Зебелинская летопись」(НЗБ), 「ノヴゴロド第三年代記 Новгородская третья летопись」(НЗ) [Новгородские летописи, 230-32] が続けて集成された。

16世紀の80年代, НУВ の集成者はこの年代記を集成する主要な原本として全ルーシ的年代記である С1-мл を採用した。すでにモスクワの完全な支配下に入っていたこの時代のノヴゴロドでは、全ルーシに広く流通していた公認の年代記にノヴゴロドの地方的情報をつけ加えるという編集方針を取ったのである [Азбелев 1960, 11-32]。

その結果, НУВ には6860年の記事にソフィア系統の「遺言状」のテキストが収録されることになり, НУВ を底本とした НЗ, НЗБ も同様の系統のテキストを引き継ぐこととなった。

後期ノヴゴロド版には先行のソフィア第一年代記版と比べて若干の地方的色彩をもった異読が認められるが,⁹ その改変は誤記が定着したものが多く、強い動機づけは認められない。

2. ノヴゴロド系統 Новгородская редакция

1430年頃にノヴゴロド大主教エフフィーミイ二世によるノヴゴロド文化復興の運動の中で「ノヴゴロド・カラムジン年代記」(НК)とその再編集である「ノヴゴロド第四年代記」(Н4)が集成された。その際、主要な源泉である НСС の『遺言状』の原型テキストが改変されて成立したのが、ノヴゴロド系統のテキストである。

すでに上で述べたように、この系統はイデオロギー的な改変によって成立したもので、原型テキストにあらわれた親モスクワ的な要素を削り、対スウェーデン関係におけるノヴゴロドの役割を強調する手直しがなされている。¹⁰

この系統のテキストは「ノヴゴロド第五年代記 Новгородская пятая летопись」(Н5) [ПСРЛ Т. 4, Ч. 2, Вып. 1, 1917, 262-63], 「アヴラムカ年代記 Летописец Авраамки」(ЛА) [ПСРЛ Т. 16, 1889, Стб. 80-81] などの15世紀後半のノヴゴロドの諸年代記に伝えられたが,¹¹ ノヴゴロドの独立喪失と年代記編集活動の停止によって、それ以上テキストが進化することにはなかった。しかし、16世紀にモスクワで編集された二つの年代記「ニーコン年代記」(Нкн)と「アルヒーフ年代記」(Арх)においては、資料を補足するための副次的な出典として利用されている。

3. エルモーリン・リヴォフ年代記系統 Ермолинско-Львовская редакция

15世紀70年代の初頭に НСС を下敷きに新たな集成本が編集され、80年代にこれを簡略化した独自の集成本 (Сокращенная редакция Общерусского свода) が作成された。この簡略化に際して『遺言状』のテキストも大幅な改変をほどこされ、新たな系統が成立した。

簡略化という集成本の全般的な方針を反映して、作品においても冗長な表現が削除され、テキストが短くなっている。同時にこの改変には教会的な動機づけが認められ、部分的には教会的な文体の訂正や加筆がなされるなど、記述が教会的傾向のもとに「合理化」されている。ここにはスウェーデンのカトリック勢力に対して正教の優位性を主張する動機を見て取ることができる。¹²

『遺言状』のテキストは「エルモーリン年代記 Ермолинская летопись」(Ерм) [ПСРЛ Т. 23, 1910, 110-11] にもっともよく反映されており、さらに、その系統を引く「リヴォフ年代記 Львовская летопись」(Льв) [ПСРЛ Т. 20, Ч. 1, 1910, 186-87] (1518年頃成立)、16世紀中頃成立の「ホルモ

ゴール年代記 *Холмогорская летопись*」(Хол) [ПСРЛ Т. 33, 1977, 83-84], 15世紀末から16世紀始めにかけて成立した通称「七十二部族年代記 *Летописец от 72 язык*」(Л72) [ПСРЛ Т. 28, 1963, 72-73, 233-34] に保持されている。

4. ニーコン年代記系統 *Никоновская редакция*

4-1. ニーコン年代記版 *Никоновский вид*

1520年代にモスクワ府主教ダニールの指導のもとに「ニーコン年代記 *Никоновская летопись*」(Нкн) [ПСРЛ Т. 10, 1862, 224-25] が編集された。この年代記は先行の年代記記事に資料をつけ加え、文体的にも大幅に手直しがなされ、まったく新しい年代記集成になっている。

この年代記の「遺言状」のテキストの原本となったのは Ерм と Н5 のテキストの二つだが、文体的改変がほどこされた上に二つのテキストが組み合わされて、Ерм のテキストの五割増し以上の分量になっている。

内容的にはこの年代記の全体的な傾向を反映して、教訓物語的な要素が増え、歴史文書というより歴史物語的な性格を強めている。

この系統にあらわれた *щапление*, *играние* などの特殊な用語法、同義的な文の同位成文を何度も繰り返す文体的特徴から判断して、この年代記の編集責任者である府主教ダニール自身が「遺言状」の改変に手を下した可能性が強い (Клосс 1980, 121)。

4-2. 絵入り年代記集成版 *вид Лицевого свода*

Нкн の「遺言状」のテキストはイワン雷帝の時代 (16世紀70年代) にツァーリの命によって作成された「絵入り年代記集成 *Лицевой летописный свод*」に引き継がれた。しかし、「絵入り年代記集成」では、さらに当時のツァーリ権力の公式な国史である「ステペンナヤ・クニーガ *Степенная книга*」によって部分的にテキストが補訂された。この補訂には強い動機づけは認められないが、改変の結果、現存する諸系統・諸版のなかでもっとも分量のあるテキストが生まれた。その意味では注目すべきテキストである。またこの版の基本写本 [БАН, 31. 7. 30 (Т. 1) *Летописец Остермановский, лицевой*, Л. 463-470] に収録されている12葉の挿画は、16世紀の人々が「遺言状」をどう解釈したかを知る上で興味深い。

5. ステペンナヤ・クニーガ系統 редакция Степенной книги

モスクワの府主教座がイワン雷帝の意を受けて16世紀60年代に編集した「ステペンナヤ・クニーガ Степенная книга」(Стп) [ПСРЛ Т. 21, Ч. 2, 1913, 390-91] のテキストに代表される系統。『遺言状』は年代記の記事としてではなく、第10章第11階梯(глава 10, степень 11)に収録されている。

テキストは Воскр のテキストを主要な原本として、ソフィア系統のいずれかのテキストによってごく部分的な補正がなされている。

内容的には、「ステペンナヤ・クニーガ」の全体的なイデオロギー傾向を反映して、歴史文書の要素を保持しようする傾向が見られる。そのため、大幅な改訂ではなく、若干の文体的な改変にとどめている(当時のモスクワ人には分かりにくい рукописание の語を завет に置き換えるなど)。

諸写本におけるテキストは安定しており、改変の余地のない権威あるテキストと見なされていたと思われる。

6. ノヴゴロド・ポゴージン年代記系統 Новгородско-Погодинская редакция

上述の後期ノヴゴロドの三つの年代記中の『遺言状』のテキストはソフィア系統を基本的に継承していたが、17世紀末に「ノヴゴロド・ポゴージン年代記 Новгородско-Погодинская летопись」(НПг)が НЗ のテキストをもとに再編集されたときに(第三版) [Азбелев 1960, 77-84], 『遺言状』のテキストが大幅に改変され、新しい系統が成立した。

テキストは、НПг の編集方針であるノヴゴロド関連の年代記記事の簡略版作成の方針を反映して、НЗ のテキストが大幅に簡略化されており、事実関係のみを伝える作品、長めの年代記記事といった体裁になっている。いわゆる簡略本(краткая редакция)とすることができる。

IV. 結論

15～17世紀の年代記における『遺言状』のテキストの歴史を概観してまず気がつくことは、新しい作品の系統の成立は、例外なく大きな集成本の成立にもなっていること、つまり、年代記全体が大きな変化をこうむったときに、作品も変化していることである。テキストを分析すると、ほとんどの系統の成立の際に、年代記の全体に認められる改変の特徴が『遺言状』にも及んでおり、それぞれの年代記編集者自らが『遺言状』のテキストに手を加えたことは明らかである。

このことは、他の作品についても指摘されてきた、年代記収録作品のテキスト史における年代記というジャンルの枠組みの影響力の強力さを、¹³ この作品についても再確認することができた。

以上と関連して興味深いことは、系統の成立を節目としたテキストの進化の中で、作品のジャンルの性格もまたわずかながら変化していることである。

最初期の『遺言状』のテキストはジャンルの枠組みとしては、15世紀にはすでに存在していた「公の名による法律文書 *княжеская уставная грамота*」を基本的なジャンルとしている。¹⁴ ところが作品が年代記に編入されると、公文書としての現実的な役割は失われ、過去の歴史的な文献として扱われるようになる。そして諸年代記の流れの中で作品が伝えられていくとき、年代記の編集・集成者は編集意図にそって作品のジャンルの性格まで変えていこうとする。

たとえば、常にスウェーデンと緊張関係にあったノヴゴロドで成立したノヴゴロド系統では、ルーシへの侵入を諷める中心テーマの部分が拡大しており、公文書としての性格は保持されている。一方、エルモーリン・リヴォフ年代記系統では、文書の現実的な意味は失われ、十字架接吻の誓いを破った者に対する神の罰が強調された改変が加えられ、文体的にも教訓書(*поучение*)的な要素が入り込んでいる。さらに、16世紀のニーコン年代記系統となると、教訓書的な要素が拡大すると同時に、歴史物語の部分も書き足され、全体として物語文学(*повесть*)に近づいている。そして、17世紀のノヴゴロド・ポゴージン年代記系統となると、作品を要約することが優先され、他の年代記記事(*летописные известия*)とあまり変わらなくなる。

諸系統の成立と展開にともなうこのようなジャンル面での変化も、年代記収録作品のテキストの歴史に特有の現象として、注目すべきだろう。

(なかざわ あつお・新潟大学)

注

¹ ロシア中世文献のテキスト研究は、ロシア・ソビエトでも長い伝統が積み重ねられ、方法論も緻密になっている。その成果はD.リハチョフ『テキスト学——10～17世紀のロシア文献を資料とした』[Лихачев 1983]にまとめられており、筆者の研究もここに記されている研究方法に依拠している。

² 研究には写本を用いたが、概説的な本論では個々の写本に言及する余裕がないので、各系統のテキストの参照には刊本（主に『年代記全集』）を用いた。

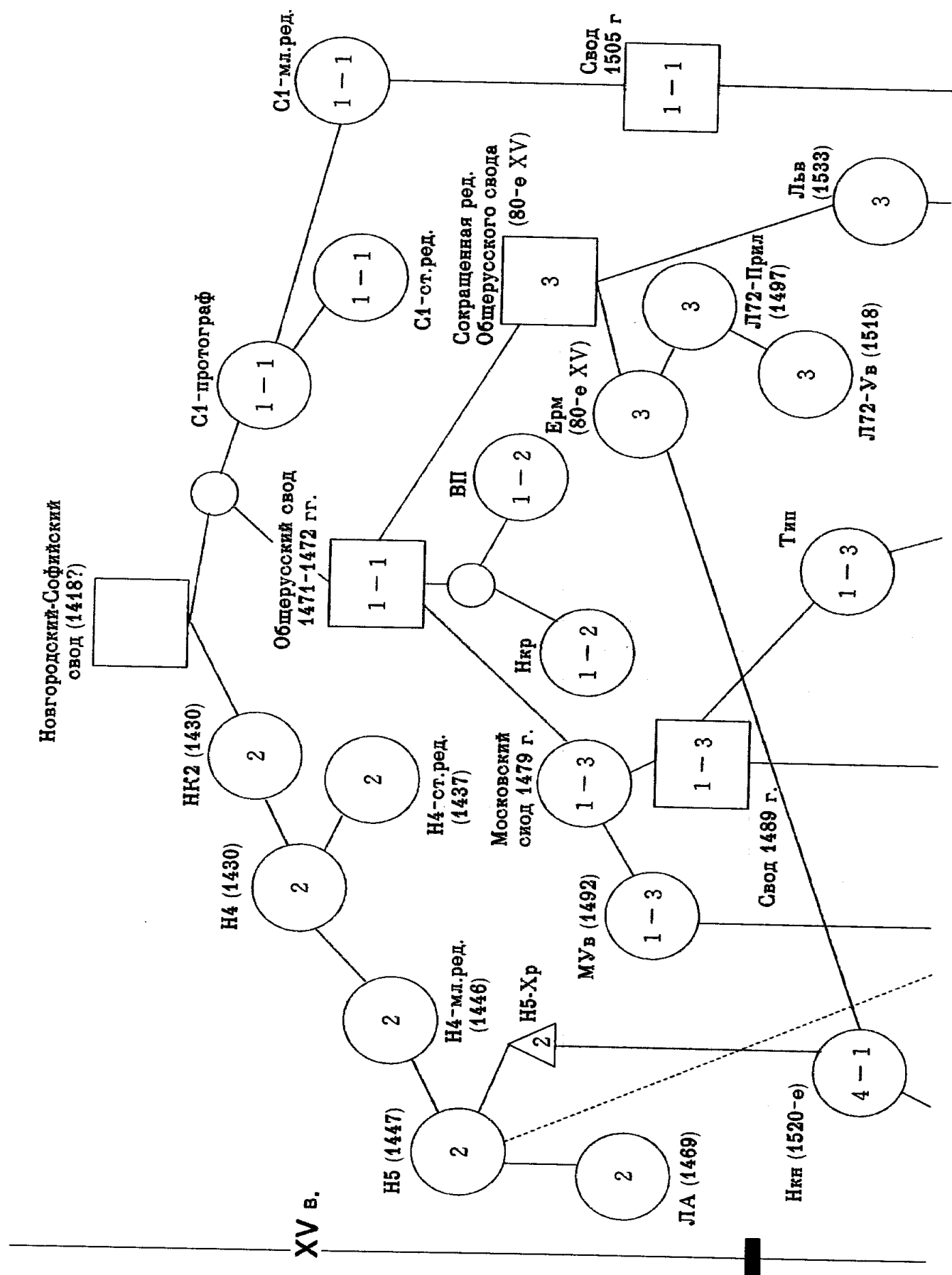
- 3 注目すべきは、1447年までの記事が収録されている、ノヴゴロド大主教庁の公式の年代記と言うべき「ノヴゴロド第一年代記（新輯本）Новгородская первая летопись, младший извод」に「遺言状」は存在しないことである。その理由として次の二点をあげることができる。①この年代記は15世紀には大きな集成を経なかったこと。それゆえ「遺言状」のような歴史文書を編入する機会がなかっただろうこと。②「遺言状」の親モスクワ的傾向がおそらくこの年代記の編集方針に合わなかっただろうこと。
- 4 НССにおける年代記の原型テキストの問題は、そのもとになったオリジナル・テキスト成立の問題を検討した別稿（中沢「スウェーデン王マグヌスの遺言状」の成立年代と作者について」、『ロシア史研究』62(1998)：48-58)で詳しく展開したので、本論では概説にとどめた。
- 5 「遺言状」の親モスクワ的な内容とその作者についても前掲の拙論を参照。
- 6 肩書きの画一化の例（イタリック体）：подъялся мѣстерьь Белгеръ (C1) / поднялся князь Бергеръ (HK2); и сръте его князь великий Александръ Ярославичъ (C1) / и сръте его князь Александръ (HK2); язь, Магнушь король (C1) / аз князь Магнуш (HK2). 記述の単純化の例：и намѣстники своя посади съ множествомъ нѣмецъ, (C1) / и мужи посадил (HK2); а намѣстниковъ и немѣць побили (C1) / а мужей моих побили (HK2).
- 7 「古ルーシの文学遺産 Памятники литературы Древней Руси」における「遺言状」の底本テキストには「ソフィア第一年代記」の最古の写本 [ЦГАДА, ф. 135, собр. Оболенского, отд. 5, рубр. 2, No. 3, л. 368-369] が用いられている [ПЛДР 4, 58-61]。この選択は原型テキストにもっとも近い写本として妥当と思われる。
- 8 ロシア文学会研究発表会（1997年10月、富山大学）の報告では作品の七つの系統を示したが、その後の検討の結果、「ティボグラフ・ヴォスクレセンスカヤ年代記系統」と「ソフィア系統」との間の異読には「目的意識的な改変」はほとんど認められないと判断し、前者を後者の一版本(вид)とした。なお口頭報告ではテキスト学の方法論的問題を主に取り上げたが、本論ではテキストの歴史そのものに重点を置いている。
- 9 この版に特徴的な異読の例（イタリック体）：того не порядя (C1) / того не помня (НУв, НЗ, НЗБ); под Копорьею (C1) / под Корелю (НУв, НЗ, НЗБ); сын мой Сакун (C1) / сын мой Исакун (НУв, НЗ, НЗБ).
- 10 親ノヴゴロド的改変の例（イタリック体）：и пришед великий князь Андрей Александровичъ, город взя (C1) / и пришед князь Андрей с новгородци, город взя (HK2).
- 11 この二つの年代記では「遺言状」は6860(1352)年ではなく、6856(1348)年の記事として、マグヌス王のノヴゴロド遠征の記事の直後に配置し直されている。これはН5の編者に見られる形式的合理性のあらわれとも見られる。

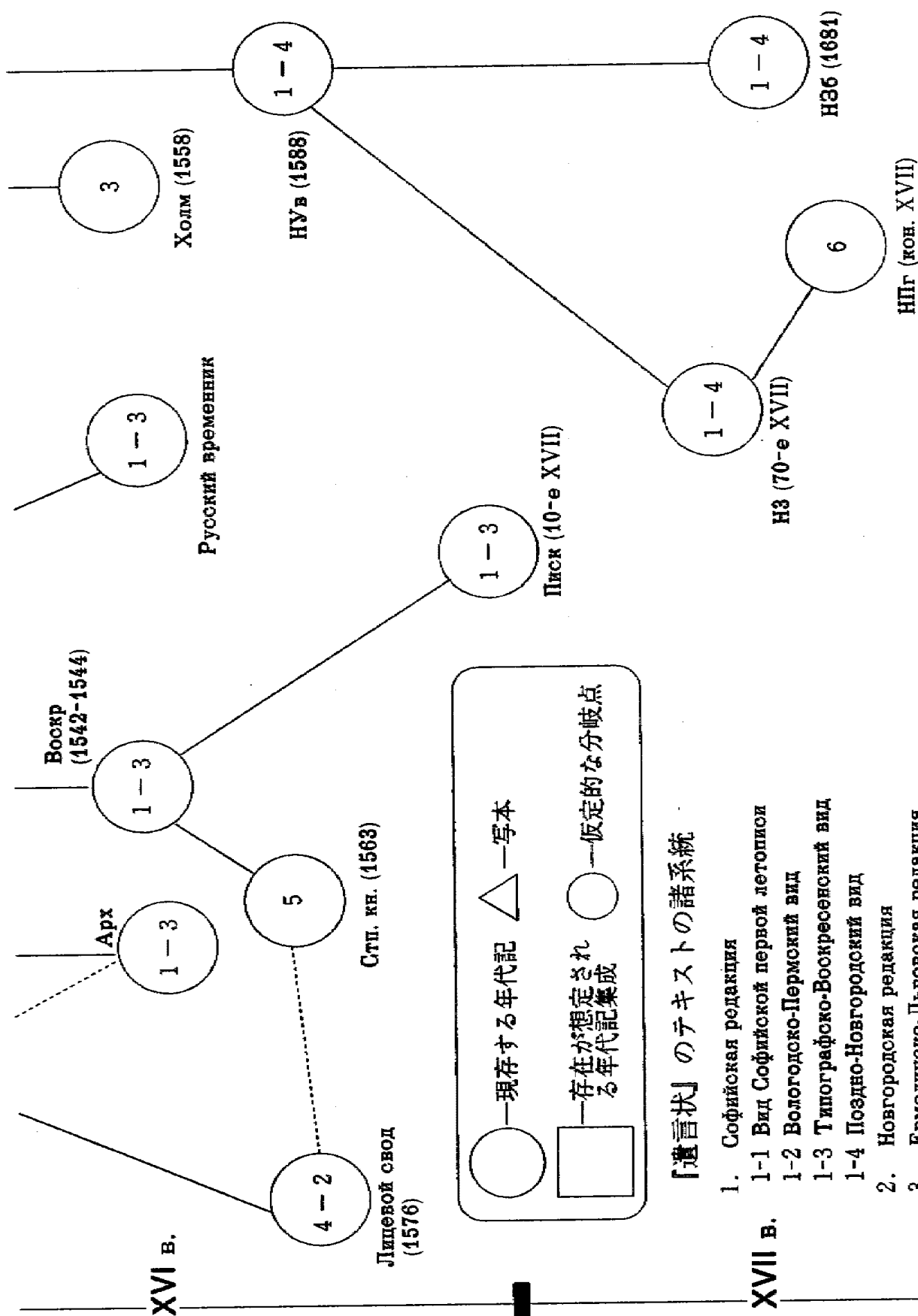
- 12 **Ерм** では全体としてテキストが省略されているにもかかわらず、次のような教会的な補足箇所がある (イタリック体) : *поднялъ есми со всею землею свѣискою, хотя привести Русь в свою вѣру; и взяхъ шедъ, городъ Орѣховець, а на льсти же.*
- 13 この問題は、年代記収録の作品をテキスト学的に研究した一連の論文が例外なく指摘している [Кучкин 1974; Лурье 1980]。
- 14 「遺言状」執筆の際に作者が利用した資料は多数あるが、ジャンル面では「ウラジーミル・スヴァトスラヴィチ公の法規 *Устав Владимира Святославича о десятинах, судах и людях церковных*」のノヴゴロドで15世紀に改編された版 (Археографический извод) [Щапов 1976, 17] が直接の手本になったと考えられる。

参考文献

- Азбелев 1960 — Азбелев, С. Н. *Новгородские летописи XVII в.* Новгород, 1960.
- Клосс 1980 — Клосс, Б. М. *Никоновский свод и русские летописи XVI-XVII веков.* Москва, 1980.
- Кучкин 1974 — Кучкин, В. А. *Повести о Михаиле Тверском: Историко-текстологическое исследование.* Москва, 1974.
- Лихачев 1983 — Лихачев, Д. С. *Текстология: На материале русской литературы X-XVII веков.* Ленинград, 1983.
- Лурье 1976 — Лурье, Я. С. *Общерусские летописи XIV-XV вв.* Ленинград, 1976.
- Лурье 1980 — Лурье, Я. С. *Повесть о битве на Липице 1216 г. в летописании XIV-XVI вв. ТОДРЛ, Т. 34.* Москва; Ленинград, 1980. 96-115.
- Новгородские летописи — *Новгородские летописи.* СПб., 1879.
- ПЛДР 4 — *Памятники литературы Древней Руси: XIV-середина XV века.* Москва, 1981.
- ПСРЛ — *Полное собрание русских летописей.*
- Словарь книжников 1989 — *Словарь книжников и книжности Древней Руси: Вторая половина XIV-XVI в. Ч.2.* Ленинград, 1989.
- Щапов 1976 — *Древнерусские княжеские уставы XI-XV вв.* Издание подготовил Я. Н. Щапов. Москва, 1976.

付表：十五～十七世紀のロシア年代記における『マグヌスの遺言状』のテキスト進化の系統図





「遺言状」のテキストの諸系統

1. Софийская редакция
 - 1-1 Вид Софийской первой летописи
 - 1-2 Вологодско-Пермский вид
 - 1-3 Типографско-Воскресенский вид
 - 1-4 Поздно-Новгородский вид
2. Новгородская редакция
3. Ермолинско-Львовская редакция
4. Никоновская редакция
 - 4-1 Никоновский вид
 - 4-2 Вид Личевого свода
5. Редакция Степенной книги
6. Новгородско-Погодинская редакция

Ацуо НАКАДЗАВА

О РЕДАКЦИЯХ «РУКОПИСАНИЯ МАГНУША» В РУССКИХ ЛЕТОПИСЯХ XV-XVII ВВ.

«Рукописание Магнуша» — фальсифицированное завешание шведского короля Магнуса Эриксона (1316-1374), сочиненное в Новгороде в начале 10-х годов XV в., — встречается в большинстве новгородских и общерусских летописей XV-XVII вв. под 6860 (1352) г.

Автор данной статьи провел текстологическое изучение этого произведения, рассмотрев около 150 дошедших до нас списков в составе русских летописей, и установил 6 редакций (и 6 видов под 2 редакциями), ведущих свое начало от предполагаемого протографического текста в Новгородском-Софийском своде. Общая картина эволюции текста показана на прилагаемой генеалогической схеме. В статье рассматриваются вопросы о времени и обстоятельствах становления каждой редакции, дается характеристика каждого текста.

Автор приходит к выводу, что тексты «Рукописания» развивались в полном соответствии с общей тенденцией развития русского летописания, а схема редакций произведения почти точно повторяет схему русских летописных сводов. Каждая новая редакция «Рукописания» создавалась путем переработки текста редакторами самого летописного свода, и в каждой из них отчетливо прослеживается редакционная направленность, либо идеологическая, либо стилистическая.

В связи с этим важно отметить, что в ходе развития редакций в той или иной степени подвергалась изменениям и жанровая особенность произведения. Первоначально «Рукописание» было создано по примеру «княжеской уставной грамоты». В Новгородской редакции еще сохраняются его основные жанровые признаки юридического документа. А в московских редакциях конца XV-первой половины XVI в. — Ермолинско-Львовской и Никоновской — произведение уже приобрело облик исторического и дидактического повествования. Дидактические моменты особенно заметны в Никоновской редакции. В Новгородско-Погодинской редакции, относящейся к концу XVII в., текст стал уже более похож на обычную летописную статью.